

ローカルなコンテクストにおける民具の理解に向けて

—四国・那賀川上流地域の天秤腰機を事例に—

加藤 幸治

はじめに

本稿の目的は、ローカルなコンテクストにおける民具の理解を、オルタナティブな民具観のひとつとして提示することにある。

基本的な問題意識は、民具研究における素朴な進歩主義、すなわち個別地域で使用される古い様式とされる民具がいずれはより高度な様式の民具に転換するであろうという、無根拠の予測に対する批判である（註1）。

これに対し筆者が設定する視角は、ある形式の民具を使うことの合理性は、機能面における合理性のみによって規定されるのではなく、ローカルなコンテクストにおいて構築されるというものである。具体的な接近方法としては、民具の使用に大きな影響を及ぼすと考えられる、身体や素材の特性、生産・流通体制、生計維持における位置づけ、道徳や価値観といった諸要素を描出する。これによって、古い様式と位置付けられた民具が、最適なものとして使用され続ける理由が明らかになると期待される。

1では、筆者がこうした問題意識を抱いた背景として位置づけられる物質文化研究の動向について述べる。2では従来の機（はた）の研究からその系譜論の概要について述べる。3ではフィールドに

おける布製作の実際について報告し、4ではその生業に関わるローカルなコンテクストについて事例を提示する。まとめでは、本稿における視角の妥当性と課題について述べる。

研究対象は、阿波太布（あわたふ）と通称されるコウゾ布製作に使用される天秤腰機（てんびんこしばた）であり、フィールドは四国のほぼ中央に位置する那賀川上流にある徳島県那賀市旧木頭村である。

資料調査は二〇〇三年八月、中川清氏を会長とする阿波太布製造技法保存伝承会（以下、保存伝承会と記す）のメンバーが製作活動を行っている交流施設である太布庵にて実施した。調査時、メンバーは四〇代〜八〇代までの男女約一五名であり、男性はコウゾの栽培と加工、女性は糸績み、整経、機織り等の作業にあたっていた。本稿の技術的なデータの大部分は中川会長から教示されたものと筆者自身の観察をもとにしている。筆者は一九九九年より、後述の沖ノ島出土の天秤腰機の金銅製模造品をもとに復原した機で麻布を織る実験を行ってきたおり、調査では保存伝承会メンバーから機を使用させてもらって機織り技術の実習を受けた。その際の様々な会話は、本論に不可欠な語りとして適宜提示していく（註2）。

1 「モノの自律的な文脈」と民俗誌的な視点の接合

近藤雅樹の「民具研究の視点」における「古典的な民具観」批判は、民具研究が乗り越えなければならない重要な指摘である。「古典的な民具観」とは、民具概念の本質主義、あるいは民具の真正性（オーセンティシティ）と置き換えることができ、その根本にあるのは伝統―近代の二項対立図式を想定し、前者を抽出することで伝統的な社会を描き出そうとする、恣意的な選別への志向性のことである。近藤は、「民具は、（中略）生活文化の様相を明らかにするために不可欠な物証として、その製作技術や使用状況を知ることができると伝承性によって評価される。逆にいえば、伝承的な日常の営みに供される物品であるかぎり、あらゆる物品が分析概念としての民具という言葉によって包括され、研究対象となる。」と述べている。「分析概念としての民具」を「古典的な民具観」に代わる新たな枠組みとしたうえで、物質資料の資料化と資料操作の過程をブラッシュアップするための議論のアーリーナ形成が民具研究の課題である。

「古典的な民具観」は、民具研究が近代の諸概念に無意識に絡めとられた結果といえるが、それを相対化するためのひとつのヒントとしてここで紹介したい概念が、アルジュン・アパデュライが『モノの社会生活』(Appadurai ed. 一九八六)で主張した方法論的フェティシズムである。アパデュライは「理論的見地において、行為主体である人間がモノを意義付けによってコード化し、方法論的見地において、モノの人間の・社会的文脈を解明してくれるものは「動きのなかのモノ」(thing-in-motion)の側である。モノにつ

いての如何なる社会分析(経済学的、歴史的、人類学的分析)も最低限の方法論的フェティシズムと呼べるようなものを避けて通ることはできない。この私たちの関心をモノそのものに振り向かせてくれる方法論的フェティシズムは、モノにおいて過度に社会的にやりとりする傾向をいくらか矯正するものである」(Appadurai 一九八六、五頁)と述べ、学術的な態度としてあえてモノ(things)のコンテクストにあえて、または戦略的に「執着」する方法論的フェティシズムによって、主体―対象という図式から脱却すべきことを主張した。人間の行為の側からモノを理解する場合、何らかのバイアスが介在することは避けることができない。方法論的フェティシズムは、モノの側から人間の社会や行為を理解するという態度である。アパデュライの問題意識は、物質文化研究における研究対象の意味づけに介在するイデオロギーを批判するところであり、方法論的フェティシズムによれば、国民国家や民族集団、様々な宗教的・社会的集団に制約されることなく、人と人の関係を媒介するモノから社会を展望できるといっているのである。

このコンセプトは提示されてから二〇年を経過した現在でも、「モノの自律的な文脈」論は多方面へ影響力を持っている。

例えば文化人類学者の田口理恵は、スンバ島の布作りをめぐるモノと生活との様々な関係について記述したユニークな民族誌を作成し(田口二〇〇二)、「モノを作る人」へのまなざしではなく「モノが作る人の関係」から記述をする新たな視角を提示した。また近現代の考古学者の朽木量は、アセンブリッジとハイブリディティの概念を巧みに応用して日本近世の墓標やニューカレドニアの日

系移民の墓標を分析し、野心的な方法論的研究として注目された。より民具研究に近接した論者として挙げられる角南聡一郎は、台湾原住民の装身具に転用される貨幣の意義に注目した研究（角南二〇〇七）をはじめ、生活の文脈におけるモノの多義性についての研究を多数提示している。近年の実験的な試みは、物質資料がどのような把握できるかを論じるとどまっているが、モノの独自の存在の仕方についての関心を発展させていけば、新たな文化研究のカテゴリとなりうるであろう。

こうした動向は、研究者の主体的な意味づけによって認識される対象に、様々なイデオロギーや思想が介在することへの批判を出発点とし、それを相対化するために「モノの自律的な文脈」によって人と人の関係を逆照射するという研究課題を形成するに至った。しかし「モノの自律的な文脈」の視点を得たと同時に、その資料操作によってモノは実生活のコンテクストから乖離し、人間不在となりかねないジレンマに陥る。人間の社会―民具研究において民俗を明らかにするというと、本来の研究目的とのズレが生じていると指摘できる。

このコンセプトを民俗学に应用するためには、「モノの自律的な文脈」と民俗誌的な視点をどう接合するかを議論しなければならぬ。それを議論する舞台は、モノが使用される極めてローカルな現場であろう。

2 機の系譜論

布作り技術の発展史は、機の系譜論として描かれてきた。代表的な研究としては、角山幸洋による『日本染織発達史』（角山一九六八）が挙げられる。機の系譜論においては、腰機（あるいは原始機）↓天秤腰機（あるいは地機、下機、居座機、神代機）↓高機という発展段階が設定される。本稿が対象とする天秤腰機は、沖ノ島で表面採集されたとされる古代の金銅製模造品が有名である（註3）。この様式の機は、東京都八丈島の黄八丈や滋賀県の近江上布、本稿で対象とする四国・那賀川上流の太布など、各地で近代まで用いられてきたことが知られている。

筆者の関心は、この機の様式のパターン展開そのものについての議論にはない。言うまでもなく、一般的な技術革新の展開を明らかにすることの重要性は、従来と全くかわっていない。本稿では、様式では同じカテゴリに含まれる機であっても、その受容の仕方に多様性があることの意味を問いたいのである。

3 阿波太布の製作技術

* 阿波太布の概要

阿波太布（たふ）とは、和紙の原材料となるコウゾ（楮、学名：Broussonetia kazinoki × B. papyrifera）の樹皮の繊維で織った布で、木綿（ゆふ）と呼ばれる布のひとつと言える（註4）。太布は四国の山間部で広く作られていたと考えられるが、現在では那賀川

上流の那賀郡那賀町旧木頭村でのみ製作されている。

阿波太布の生産については、一八世紀末の本居宣長の『玉勝間』や、一八五六(安政三三年)刊行の阿波の国学者野口年長の『粟の落穂』に記述がみえる。『玉勝間』では、阿波太布(ここ)ではカジノキ布)の技術が残っており非常に白く強いと、その特徴を述べている。また後者の『粟の落穂』では、祖谷の冬の寒さを太布の枚数で表現する言い回しが残っているが、野口が訪れた時は木綿も着ているとあり、太布が山村の衣服として一般的に用いられてきたことが分かる。

太布は仕事着や阿波三盆糖の黒蜜を搾り出す袋布、穀物袋、畳の縁として、近代以降も作り続けられた。その後は衰退の一途をたどるが、一九七〇年に故岡田ヲチヨ氏が徳島県無形文化財技術保持者に指定され、ヲチヨ氏が一九八三に他界した後、一九八四年保存伝承会が改めて同指定を受け、現在に至る。現在の保存伝承会メンバーは、実生活で太布製作に従事した経験者はおらず、基本的には岡田ヲチヨ氏の技術を継承するサークルである。

この地域に阿波太布製作技術が育まれた経済的背景には、近世より麻植・美馬・三好・那賀各郡の山村は、吉野川流域で生産される阿波和紙の原材料供給地であり、和紙原料として出荷するコウゾ皮が豊富にあったことが挙げられる。かつては、コウゾの収穫・コウゾ蒸し・皮剥ぎ・表皮の除去・灰汁炊きなどは男性の仕事、繊維とりは女性や子供の仕事、機織りは女性の仕事、出荷は男性の仕事と分業され、冬の季節的な生業として太布作りが営まれたという。

ちなみに民俗学的な研究では、早いところでは明治三〇年に鳥居龍蔵と玉置繁雄が民族誌学的調査を行っている(鳥居一九五三)。

鳥居の報告には女性が身につける麻の裳の記述はあるが太布にはふれていない。一方玉置は、「阿波国木頭山土俗」(玉置一九〇一)と題した報告では労働着として使用される太布についてふれている。昭和後期には、近畿民俗学会はこの地域の民俗誌を作成し、『阿波木頭民俗誌』を刊行している。太布の総合的な調査としては徳島県郷土文化会館による『阿波の太布』(徳島県郷土文化会館編一九八六)があり、製作技術について大西政夫による詳細な報告が収録されている。他に別冊太陽などの雑誌類で「自然布」のひとつとして紹介されたことで広く知られるところとなった。

* 阿波太布製作工程

① 原材料の栽培と収穫

太布の原材料のコウゾには、栽培種として作られてきたコウゾと野生種のカジノキがある。栽培種は総じてニカジと呼ばれる。ニカジには、まず繊維質が糸を作るのに適したアカソとアオソがある。これらは幹の色合いが赤みがかっているか青がかっているかで呼びわけ、アオソの方が繊維は良いが、アカソの方が量が取れるという。また、タオリと呼ぶ葉があまり大きくない種も使われている。こうしたコウゾは昭和四〇年代まで傾斜地の畑や田の畦畔で栽培されていたというが、現在は河川敷近くの休耕田で栽培している(写真1)。一方野生種は、マカジ、クサカジと呼ばれ、栽培種に比して歩留まりが悪い。どちらかというともカジの方が良質な繊維がとれる。野生種は、葉が大きく葉の枚数も多いため、枝条(幹や枝)の繊維が貧弱なのだと言明される。

収穫は冬期で、鎌で刈り取ったコウゾは、短く切りそろえないで刈ったままの長さで束ね、直径約一メートルの釜に高さ約二メートルの深い桶を蓋として被せ、数時間蒸す。和紙原料の場合は枝を九〇センチ程度に短く切るが、糸をとる場合は少しでも長い繊維を確保するため、こうするのである。蒸し上がったコウゾは、皮を剥いて灰汁で煮る。そのあと、モミガラをまぶし、足で揉むようにして表皮（オニカワ）を剥き、そのまま常温の水に一昼夜漬る。翌朝それを屋外の日当たりの悪いところに広げていったん凍らせ、木槌で叩いたり、藁草履で踏んだりして繊維をやわらかくする。

和紙原材料の場合は、最終的に繊維をばらばらに叩碎するため、作業のし易さ、出荷のし易さを念頭に材料を加工する。一方、糸をとる場合は繊維を極力切らないことが歩留まりに大きく関係するため、上記のような道具立てと工程になる。阿波和紙と阿波太布の原材料は、栽培する植物は同じものであるが、加工初期段階からその方法に差異が見られる点は、和紙原材料の余剰の流用や欠品の再利用ではないことを示しており興味深い。

②糸作り

やわらかくなった皮は、へらと呼ぶナイフのような刃物で一方向に擦る。これは繊維の向きをそろえ、叩いた時にもつれた繊維を伸ばす効果があるという。そして指で皮を広げながら、繊維を裂くように解いていく。裂いた繊維は、指をぬらして親指と人差し指で捻りながら繫いで糸を績む（写真2・3）。これをカジ績みという。績んで長くつないだ繊維は、水にぬらしてしぼり、糸車にかけて撚りをかけていく。織る際に経糸となる糸は、テンションがきつくかか

るので撚りも少し強めにし、緯糸はそれより弱く作るのがコツだという。糸は、再度灰汁で炊いて川で洗い、ねじって水を絞る。この時、繊維の捻れを点検して伸ばしながらの作業となる。最後に米糠をまぶして水分を均等に吸収させ、天日干しして乾燥させる。乾燥後は、表面の米糠を落として保管する。

この糸作りの特徴は、何度も糸を意識的に伸ばして真直ぐにすることである。コウゾの繊維は、棉や絹、麻などよりもはるかに硬いため、機にかける際にテンションをかけて強制的に真直ぐにするのは難しい。加えてテンションをかけすぎると切れやすい特性がある。そのため繊維をほどく段階から乾燥に至るまで、その都度糸を真直ぐに伸ばすのである。機にかけた時、捻れた部分が伸びると経糸の長さが揃わないのである。

③整経

まず経糸の長さを何反と決め（鯨尺）、整経台に糸を箆の目の数だけ往復し、糸をかける。当然ここで綾を作る。糸をかけ終えたら整経台から外し、箆に糸を通す。一つの目に上糸一本、下糸一本の二本を入れていく。太布庵で使用されている箆は、一六〇の目であった。天秤腰機は経糸を腰で直接引っ張る構造なので、布の幅は腰幅に制約される。縦糸が箆に通ったら、チキリに巻き取っていく。このとき、オシノと呼ぶ細いササダケを四〇センチほどに切ったものをはさみながら巻き上げる。これは何も巻かずチキリに巻くと、中央部分が膨らんで、糸のテンションが左右と中央で異なってしまうからである。巻き上がったら、綾を箆の奥に通す綾返しを行う。そして「上糸かけ」と呼ぶ木綿糸による綜統をかけ、整経が完了する。

この工程は、天秤腰機の糸かけの一般的なものと大差ないと思われる。聞きでは、一回かけた経糸を一冬かけて織るのが基本であったという語りが興味深い。これはすなわち整経は一年に一回しか行わないということである。整経を一人前に行うためには、年数を重ねなければならぬということであり、後述する経験値を評価する語りとも結びつくものである。

④機織り

現地では、機織りが始まれば、七割がた布は出来上がっているとされる。阿波太布の機織りには、もっぱら天秤腰機が用いられてきた（写真5）。機織りとは、天秤腰機で経糸の上糸・下糸を交互に入れ替えながら緯糸を通す動作を繰り返して、布の組織を作っていく作業である。通した緯糸は、現地ではサシコシとよぶ杼でつめていく（写真15〜20）。

天秤腰機の最大の特徴は、足紐を引くと綜統が持ち上がり下糸が上糸と入れ替わる仕組みにある。足紐を引かずに腰を伸ばした状態が、上糸・下糸がそのままの状態である。足紐を引くと同時に腰を前かがみにし、綜統が十分に下糸を持ち上げて上糸・下糸を入れ替わったら、足紐は引いたまま腰を伸ばして糸にテンションを加えた状態が、上糸・下糸が反転した状態である。テンションをかけるときには、チマキに巻かれた布が伸びようとするので、これを下腹を膨らませて止めるという動作も必要である。

阿波太布の機織りの特色は次の点にある。第一に、コウゾの繊維という、硬く毛羽立ちやすい繊維は、上糸・下糸が引つかかかってしまつてうまく交差しない。これを滑りやすくするため、現地では箆

の手前の経糸にフノリを塗りながら織り進めている。こうすることで緯糸を通すまでに経糸がフノリでコーティングされ、滑りやすくなるのである。織りあがった布は、川で晒してフノリを落とす。第二に、糸がとてもしなやかで、腰の微妙な加減で縦糸の張り具合が調整できる天秤腰機が、コウゾという素材には適しているという点である。切れた繊維をつなぐため、手元には短く績んだ糸を束ねて用意しており、切れるとすぐにいわゆる機結びで経糸を繋ぐのである（写真14）。

阿波太布の機の特徴は、様式から系譜論的に見れば、天秤腰機の布機型に分類される。しかし、台部と床の斜度は約三〇度と急角度であり、マネキの腕部が平行なのも特徴的である（写真5）。

⑤使用

こうして織り上がった阿波太布（写真6）は、仕事着や袋などに仕立てられる。太布庵に展示されていた昭和四〇年代以前に使用されたという製品には、ワツパ袋（弁当袋、写真7・8）、ツノ袋またはモジ袋（山仕事の道具入れ、写真9）、仕事着（写真10）がある。また、前述のように阿波三盆糖の搾り布は主要な製品として出荷されている。現在は、コースター、しおり、筆入れ（写真11）、ブローチ、手提げカバンなどが観光みやげとして作られている。

ところで織りたての布はゴワゴワとした質感である。しかし使用するにしたがって、徐々にしなやかさを持ち、摺れても破れることのない強靱で柔らかい布になるという。太布庵には、親子三代に渡つて使われてきた仕事着が展示されていたが、非常に柔らかいものであった。このことを保存伝承会長の中川氏は、「織りあがったと

きは未完成。使うことで完成していく。太布とはそんな布です」と語る。

*阿波太布と俗信

天秤腰機による機織り作業は、一時間織つても二〇センチ程度しか進まない。そのためひと機（機にかけた経糸）織り終えた時に、感謝の意を込めて機のチキリの上に一升杓に白米を供えたという。また七月七日の七夕では、庭に植えたナンテンなどの枝に、ワラ縄に花をはさんだものと、績んだコウゾを輪にしたものを飾つたという。これは「織姫」に機織りの上達を祈願するためだという。

逆に禁忌としては、ものを食べたり飲んだりしながら織つてはいけないという。糸が「噛む」＝絡まるということから縁起が悪いとされたのである。

4 天秤腰機使用のローカルなコンテキスト

本章では、天秤腰機を使用した阿波太布製作を、様々なローカルなコンテキストに関連させて記述する。以下、天秤腰機使用に対して影響を及ぼす様々な因子から、天秤腰機使用のローカルなコンテキストを描出してみたい。本章のデータは、太布庵での調査における様々な会話から得たものである。

*素材の特性

そもそも阿波太布に使用するコウゾ糸は、伸縮性に乏しいため強

いテンションをかけられない。高機にかけると糸切れを頻繁に起こすため、保存伝承会メンバーには高機使用の可能性に否定的な意見が多い。加えてコウゾ糸は、繊維が毛羽立ち、起きた繊維は硬く引っかけやすいため、高機では上糸と下糸の交差に支障をきたす。

この地域では、糸切れ予防と毛羽立ちを抑えるため、布海苔でコーティングする対策を施してきた。また、この地域の天秤腰機は機の傾斜角度を急にする工夫がなされているが、これについて引つ掛かりやすい糸がきちんと上下入れ替わっているかが見やすいという意見が多く聞かれた。コウゾという原材料の特性への対応が十分になされていることは、天秤腰機の有効性を高めている。

また、糸作りで灰汁でたいである程度柔らかくする工程があることは注目される。灰汁はタンパク質を溶かすため、糸の劣化につながる点での時点で止めるのが重要であるが、結果的に糸は柔らかくなる。しなやかさに欠けるコウゾ糸を、天秤腰機で織りやすくするための工夫の一つである。米糠をまぶすのも、このことと関係しているよう。

*身体と熟練

天秤腰機は、足・腰・両手・腹・背中などの一連の動作で布を織る点に特徴がある。無理な力が入っていると、一時間も持続できないことは筆者も調査の過程で実感した。持続した仕事をするためには、無駄のない動作が求められる。つまり、動作の連続性が問題とされる。保存伝承会メンバーからは、各動作と動作間における、道具の置き場所や手の置き場所が、適切に配置されているかについて

多くの指示をされた。動作に無駄がなくなり、機を動かす際にでる様々な音にリズムが出てくると「上手くなった」と評され、道具を落とすとひどく怒られるのは、このことをあらわしている。

また、作業を終えた時に筆者が「肩がこった、腰が痛い、背中が張った」などと言うと、それはどの動作が悪いからだと言明される。例えば、肩のこりは縦糸を張る時の姿勢が悪い、腰が痛いのは縦糸を緩める時に背中が丸まっている、背中が張るのは肩の力が抜けていないからなどと指摘される。動作と疲労が関連付けられて認識されている。

組織のそろった布を作るために必要な均等なテンションは、道具の機能によって確保するのではなく、使用する側の機の使い方に求める独特の思考は、天秤腰機を使用することそのものへの疑問を生じさせない方向に働いていると考えられる。

*道徳や価値観

筆者の調査の過程では、作業の速さよりも、単調な作業の継続に重点が置かれた助言が多かった。例えば、一日に行う作業ごとにマチ針を目印として布に刺すが、その幅が日ごとに違っている仕事は、「よい仕事」ではないのだという。つまり今日は頑張っていて昨日よりたくさん織ったといったことは評価されず、毎日同程度進むことが「よい仕事」とされている。

これに関連して、整経で巻く経糸の量はひと冬分の機織り作業量だという点は重要である。対時間効率という意識の希薄さと、シーズンの仕事量が決まっている点は、この地域の布製作において非

常に重要な点である。ただ、この地域の天秤腰機の子キリの幅が非常に広い点は、一度に巻ける量を増やす努力の痕跡と解釈することもできる。シーズンの仕事量を増やすための工夫が天秤腰機において達成された可能性も想定できる。

ところで興味深いことに、保存伝承会メンバーとの雑談のなかでは、「上手い人」とは組織がそろった布を作る人ではなく、経験年数が多い人を指すようである。熟達した人の作業は道具を変えてもそのクオリティは落ちないといい、実際に八〇代の女性が体がきついで天秤腰機ではなく市販の高機、いわゆるテーブルームを使用していたが(写真4)、阿波太布と呼ぶことには違和感がないという。作業の経験年数がそのまま熟練度として認識されているのである。天秤腰機を永年使ってこそ技術が熟練するという価値観は、阿波太布のローカルなコンテクストを理解するうえで重要な要素である。

ただし、保存伝承会というサークルにおいて形成された価値観で一部の部分が少なからずある。実生活のなかで機が織られていた時期における価値観と同じではないことは考慮する必要がある。

*複合的な生業と非専門化

この地域ではもともと稲作・畑作・林業・コウゾ栽培・シイタケ栽培・果樹栽培・黒炭の製炭・肉体労働・物資運搬など、様々な仕事を一年のなかで組み合わせて生計維持をしてきたという。太布製作は、藁製品作りや保存食づくりなどと同時に、家内労働としての側面が強い。

また太布は、自給的な仕事着等や、絞り袋としての使用がもっぱらであったので、布そのものの美しさに高い要求を必要とされない布であった。布幅の規定以外は、製品の良し悪しが比較的問題にならないため、多くの農家が家内手工業的に製作して出荷できた。阿波太布製作は専門化しなかったため、生産効率を上げることに腐心する必要はあまりなく、高機を導入するための設備投資への意欲は刺激されなかった。

こうした家内労働に近い位置づけの仕事に対しては、新たな機を導入して設備投資を図る発想を生まなかったとも考えられる。

*作業への慣れと愛着

保存伝承会メンバーは、天秤腰機が「体の一部である」とか「馴染んでいる」といった表現で機と作業への慣れを表現した。そして、「今さら新しい機織りを一から覚えたら大変」である点が強調された。また、機を徳島市内で開催された物産展や県立博物館で実演したことを「この機も出かけてきた」「実演でたくさんの人に囲まれて織った」などと非常に愛着を持って機と技術について語る場面があった。そもそもこのサークルは、元県指定無形文化財の岡田氏の技術を継承する目的を共有しているため、天秤腰機そのものを排除する思考はもとも無いが、機織りの実践においては自らのアイデンティティと深く関係するものとなっているよう。

こうした道具への愛着に加えて、天秤腰機が他地域であまり使われていない現状や、県指定無形文化財への指定の大きな要素に天秤腰機が位置づけられていることも、機への思い入れに関して重要な

要素である。コウゾ布という製品の特性のみならず、織ることを見せるというパフォーマン斯的要素も現在の阿波太布製作において重要な点となっている。保存伝承会の活動の場である太布庵も、作業を見せることを重視した施設であり、天秤腰機は阿波太布のアイデンティティとも深く関わるものとなっている。今後たとえコウゾ布に対する需要が飛躍的に増える状況が生まれたとしても、作業効率の良い高機を導入する動機は生まれにくいであろう。

まとめ

本稿では、ある形式の民具を使うことの合理性は、機能面における合理性のみによって規定されるのではなく、ローカルなコンテクストにおいて構築されるという視角のもと、天秤腰機という道具の使用とその周辺について記述してきた。以下はその考察である。

筆者は本稿において、機織りに使用される天秤腰機について、素材の特性、身体と熟練、道徳や価値観、複合的な生業と非專業化、作業への慣れと愛着の五項目に分けて様々な語りを整理した。

素材の特性では、コウゾ糸という扱いにくい素材をいかにして織るかが重要であり、この地域独自の問題解決がなされた点が天秤腰機の有用性を高めていたことがわかった。身体と熟練は、天秤腰機という道具を身体の延長とすることが、疲労との関係によって表現される点が興味深く、そのことは天秤腰機を使いこなすことへのモチベーションを高めることにもつながっているとと思われる。道徳や価値観においては、単調な仕事を爾々と進めることに重点を置く道

徳や、経験値によつて熟練度を認識する価値観と、天秤腰機が深く結びついていたことがうかがえた。複合的な生業と非專業化では、多種多様な仕事を組み合わせて生計維持をする山村の生活様式においては、個別の生業への設備投資の偏重を避けることがリスク回避と関連していたことが予想され、天秤腰機から他の機への転換は消極的であった点が指摘できる。作業への慣れと愛着においては、慣性は新たな技術を習得するよりも効率が良いとする思考が、地域においては重要な点であったことがうかがえた。また、文化財としての外部からのまなざしや技術の希少性の認識は、天秤腰機の使用そのものに付加価値を与える結果となり、道具への愛着を育むだけでなく、それを使う個人のアイデンティティにも関わる重要なアイテムとなっていた。この動向は山村の観光とも関連しているが、本稿ではそれについては考察しなかった。

筆者のアプローチは、道具を取り巻く諸要素が、系譜論において古い様式と位置付けられた民具を最適なものとして意義付けるという点を、民俗調査から明らかにすることであった。技術の系譜論のみでは、機を使用してきた人々の生活や価値観を理解することはできない。本稿で提示したように、ローカルなコンテキストをもとに、言わば道具の適応論としての民具研究を進めることは、「モノの自律的な文脈」と民俗誌的な視点を接合するという問題意識のうえで有効な方法のひとつたり得よう。

本稿は、ひとつの民具を基点に地域の民俗を記述する実験的な試みである。その方法の再検討や同様の試みの蓄積は当面の課題である。ただ、そこから導き出されるより抽象的な課題は、ローカルな

視点とコンパライヴな視点を腑分けした民俗の記述の次段階として、ローカルなコンテキストを地域で自己完結させないための、比較研究の新たなプラットフォームの設定である。

この試みの課題は、技術を扱う以上、技術の伝播や技術交流など、技術の流通との関連付けを行う必要があるが、それについては方法的な提案をできなかった。また、個別民具の比較研究を筆者は否定するものではなく、あくまで民具研究のひとつのアプローチとしてローカルなコンテキストを重視する提案を行った。それゆえ、いづれ比較研究におけるデータとの結び付けかたを提示しなければならぬ。加えて、本稿で提示したデータに深く関連しているジェンダーの問題や、権力との関係については何も論じなかった。こうした点を今後の課題としていきたい。

註

1 筆者は、技術が発展することそのものを否定するものではない。技術は従来の痕跡を残させつつ発展したり、技術革新によつて全く異なる発想のものに転換したりするものである。ここで批判したのは、個別の民具の系譜論に基づく地域差を、生活文化の洗練度の地域差と読み替える論理の飛躍についてである。発展段階に基づく民具の序列化は、道具のみを抽出して比較した際に見出せる構造上の合理性による系譜論にすぎない。しかし、しばしば安易に用いられる「この地域には古い技術が残っている」と言うような表現は、全ての地域の民俗を

同じ発展の途上に序列化する思考に立っており、「日本文化」の同質性を前提としたパラダイムを相対化できていない。昭和後期における地域主義的な民俗学の展開において、民具研究のなかにローカルな視点とコンパラティヴな視点を腑分けできていない部分があることに、ついて、学史を再検証すべきであろう。

こうした調査法を、筆者は実験民具学として提案しており、その効果は、民具の使用法や研究対象の民俗技術についての理解の深化、フィールドワークへのフィードバック、調査する者へされる者の権力関係の転覆、研究者・調査地の人々・一般市民・学生等の対話の場の形成、などにある。詳細は、加藤二〇〇六を参照していただきたい。

九州の玄界灘に位置する沖ノ島は神体島として古代から現在まで信仰対象となってきた。現在は宗像大社（辺津宮）の沖津宮をまつり、神主が交代で勤務する無住の島。島には、縄文・弥生の生活遺跡が存在するが、それ以降は数多くの祭祀遺跡が出現する。巨岩を信仰対象とした遺跡にひとつの特色が見出せるが、江戸時代に「御金蔵」と称された現在のB号巨岩からは、様々な宝物が採集された。伝御金蔵出土とされる出土品としてとりわけ有名なものが、金銅製模造品のミニチュア機である。黒田藩主黒田長政に献上されたというこの機は、奈良・平安時代のものとされ、日本の機の歴史を考える上で非常に重要な資料と位置づけられている。沖ノ島の出土品は、平成一八年に鏡や装身具、金銅製馬具、武器、武具、土器などの神宝が「宗像大社沖津宮祭祀遺跡出土品」として国宝に指定された。

樹皮布は、ポリネシア等で見られる樹皮を剥いて叩き延ばした布であり、タバと総称されるものを指す。阿波太布は、樹皮から得た繊維を糸に績み、機で織る布であり、樹皮布とは称さない。こうした布には、アイヌのオヒョウ布、全国的に見られるフジ布、山形県関川村で現在も製作されるシナ布などがある。

参考文献

- 加藤幸治 二〇〇六 「民具と現代人をつなぐ実践と公共空間」 『民具研究』 一三四 日本民具学会
- 加藤幸治 二〇一〇 「流通民具概念再考」 『京都民俗』 第二十七号 京都民俗学会、印刷中
- 近畿民俗学会編 一九五八 『阿波木頭民俗誌』 凌霄文庫
- 朽木 量 二〇〇四 『墓標の考古学・民族学』 慶応大学出版会
- 近藤雅樹 二〇〇二 「民具研究の視点」 赤田光男ほか編 『講座日本の民俗学九 民具と民俗』 雄山閣
- 角南聡一郎 二〇〇七 「先住民における多元的「貨幣」受容形態——東洋と西洋と——」 『台湾原住民研究』 第一号 日本順益台湾原住民研究会
- 田口理恵 二〇〇二 『ものづくりの人類学——インドネシア・スンバ島の布織る村の生活誌——』 風響社
- 竹内（酒野） 晶子 一九八九 『弥生の布を織る』 東京大学出版
- 竹内淳子 一九九五 『草木布Ⅱ』 法政大学出版局
- 玉置繁雄 一九〇一 『阿波国木頭山土俗』 『東京人類学会雑誌』 一七 東京人類学会
- 角山幸洋 一九六八 『日本染織発達史』 田畑書店
- 角山幸洋 一九八〇 『地機の形式分類』 『藤井祐介君追悼考古学論叢』 藤井祐介君を偲ぶ会
- 角山幸洋 一九八九 『手織機（地機）の東西差』 岩井宏實・神崎宣武・佐々木高明・角山幸洋・三輪茂雄・渡辺誠 『民具が語る日本文化』 河井出書房新社
- 徳島県郷土文化会館編 一九八六 『阿波の太布』 同館
- 鳥居龍藏 一九五三 『ある老学徒の手記』 朝日新聞社
- 弓場紀知 二〇〇五 『シリーズ遺跡を学ぶ』 古代祭祀とシルクロードの終着地 沖ノ島 新泉社
- 宗像神社復興期成会 一九五八 『沖ノ島 宗像大社沖津宮祭祀遺跡』 吉

川弘文館

永原慶二 一九九〇 『新・木綿以前のこと』 中央公論社

本居宣長著村岡典嗣校訂 一九六九 『玉勝間』 上下 岩波書店

野口年長 一八五六 『粟の落穂』（阿波叢書編集委員会編一九七六 『新

編阿波叢書』上 歴史図書館社所収）

Appadurai, Arjun. ed. 1986 *The social life of things commodities in cultural perspective*. Cambridge University press.

Pfaffenberger, Bryan 1992, "Social anthropology of technology." *Annual Reviews of Anthropology* 21

謝辞

二〇〇三年に実施した太布技術調査にあたり、阿波太布製造技法保存伝承会の中川清会長とメンバーの方々に大変お世話になり、謝意を表したい。また本稿の大意は、二〇〇九年度本学歴史学科公開講座にて「天秤腰機の実験民具学」（平成二十一年二月五日（土）押川記念ホールにて）と題して発表した。講座では天秤腰機の機織り実演を行ったが、機は和歌山県立紀伊風土記の丘より借用した。



写真1 休耕田でのコウゾ栽培



写真2 糸績み

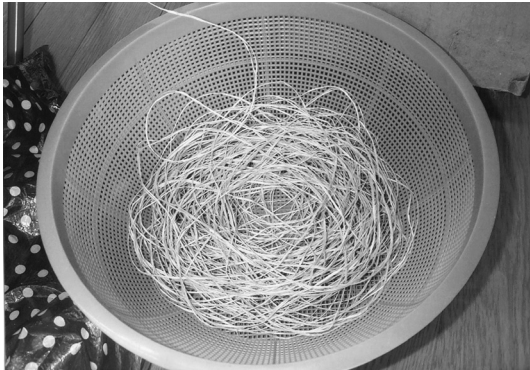


写真3 コウゾ糸



写真4 簡易な機による太布製作
下方にあるのは布海苔の鍋

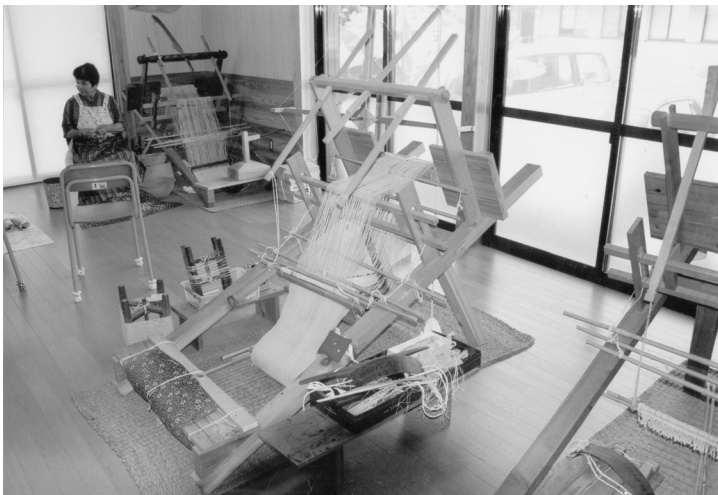


写真5 阿波太布の天秤腰機



写真6 織りあがった太布



写真7 ワッパ袋の身につけ方

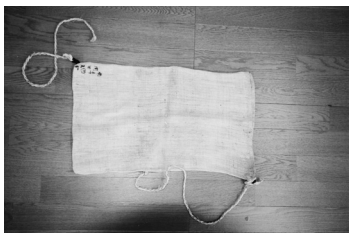


写真8 ワッパ袋



写真9 ツノ袋／モジ袋



写真10 仕事着



写真11 コースター・栞・筆入れ



写真12 太布庵での展示用作品



写真13 調査風景



写真14 機結びで切れた経糸を繋ぐ

(旧木頭村太布庵にて2003年筆者撮影)

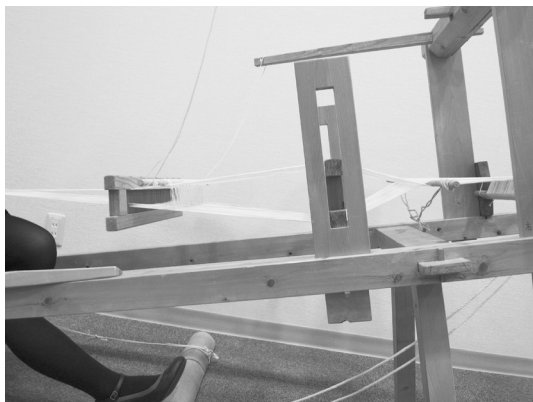


写真15 上糸と下糸を入替えない状態

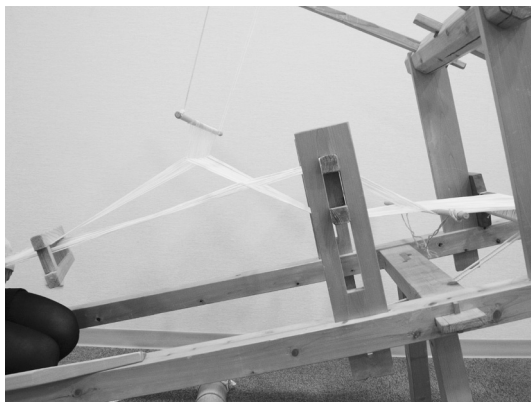


写真16 上糸と下糸を入替えた状態



写真17 上糸と下糸を入替えない状態で糸を張る



写真18 足紐を引くと下糸が釣り上げられる



写真19 足紐を引いたまま腰で糸を張る



写真20 横糸を通す



写真21 足紐を緩めて写真17の状態に戻る



写真22 杼で横糸を締める

和歌山県立紀伊風土記の丘 復元の天秤腰機使用
撮影協力：上泉友里・後藤美貴（文学部歴史学科三年生）